第２群の座長をつとめて

澤　村　明　美
（金沢医科大学附属看護専門学校）

第17回石川看護研究会学術集会，第２群の座長を務めさせていただきました。第２群は一般演題４題の発表でした。

第１席の中田智美（石川県立中央病院）さんの発表は，胸椎後縦靭帯骨化症術後下半身麻痺のため尿道カテーテルを留置している患者さんの自己導尿の確立をめざし指導したことで，患者さんの意欲や自立心の向上につながったという内容でした。術後約２年が経過し自力座位保持困難で前屈姿勢も困難な患者さんに，体位や用具の工夫をしながら長期間根気強く関わられ，結果として患者さんが自ら外出されるまでになられたことは，諦めず試みることの大切さをあらためて教えられた発表でした。

第２席の太田雅代（金沢大学医学部附属病院）さんの発表は，前立腺全摘除術後患者さんの尿失禁に対する思いや体験を面接により実態調査した内容でした。尿失禁に対する諦めと期待の入り混じった複雑な心理過程があきらかとなり、どの事例も尿失禁体験時は衝撃の段階であり，患者間の情報交換や医療者の情報提供や介入が影響しているとの発表でした。今回は調査対象が４事例と少なく，今後の更なる研究成果が期待されます。

第３席の彦聖美（公立松任石川中央病院）さんの発表は，闘病意欲を喪失している糖尿病の患者さんに対しトラベルビーの理論を基に意識的な関わりを持ち，その関わりについて考察した発表でした。患者さんとの関わりもその分析も研究者一人で行ったということであったので，客観性や妥当性の点で分析方法の検討が必要と思われます。しかし，ひとつの理論を基に日頃の患者―看護者関係を振り返り意識的に関わり方を変えた結果，患者さんに前向きな変化がみられたという発表内容は，患者―看護者関係が看護実践の効果を左右するという看護の基本に立ち返る大切さを示すものでした。

第４席の木藤美穂（金沢市立病院）さんの発表は、入院後短期間で死の転帰をたどった患者さんの家族の悲嘆の現象とその意味について分析を試みたものでした。入院中の関わり、臨終の場面での家族の言動、死別後34日目の家族宅での面接場面での言動から、家族の悲嘆について分析を試みられました。会場からは、死別後の家族の面接は半構成面接法で行ったということだがどのような面接の進め方をしたのかとの質問があり、３点の質問を準備し面接したとの返答でした。時間がなく、半構成面接法について十分な意見交換ができないまま終了となってしまいました。

第２群の４題は，患者の意欲，思い，家族の悲嘆といった心理面の分析や援助に関する研究発表でした。忙しい日常に流されることなく，相手の思いや関わり方を見直そうとする真摯な姿勢が伝わってきました。研究に取り組まれた皆様の今後更なるご活躍をお祈りいたします。質問が少なく，また会場の皆様と十分な意見交換をすすめられず座長として反省もしておりますが，発表者・参加者の皆様，今回貴重な経験の機会を与えて下さった方々に心から感謝いたします。